



War Cry

7月号

福音版

2022

July

No.2837

すべての人に 天国がある！

勝地 次郎



7月2日は救世軍創立記念日です

「東ロンドンのすべての人に天国がある―立ち止まって考え、キリストを救い主と信じる者には天国がある。」一八六五年の七月、蒸し暑い夏の夕方、東ロンドンのマイル・エンドの「ブラインド・ベガー」という居酒屋の前で、そう叫んだ人がいました。妻カサリンと共に、救世軍の働きを始めたウィリアム・ブースです。居酒屋の中からは、野次や罵声が飛び出し、ブースの周りには、聴衆が群がり、その後ろから投げられた卵が顔に命中し、黄身がゆっくりと頬をつたって流れると、彼は話を中止して静かに祈り、帽子を目深にかぶって、急ぎ足で立ち去ったのです。救世軍の働きは、このブースの伝道から始まっています。

―― 勤労階級の三分の二

以上は、いまだかつて教会堂の門をくぐったことなく、日曜には怠惰であつたり、快楽を求めたり、または何か金儲けの取引に耽つた。その結果、幾万かの人々は、全く福音につき無知である。居酒屋の前で、乱酔悪罵する人々を見た時、「どこに行つてこんな異教徒（真の神を知らない人）を見いだし得るだろうか。お前の勤労をこれほどに多く要する場所があるのか？」と天来の声がブースの耳に響いたのです。そして、彼は帰宅した後、妻カサリンに「今にして自分の終生の運命を発見した」と告げ、彼らは一切を献げて、悩み、苦しむ人々の救いに挺身したのである。

働きは英国各地に広がり、「東ロンドン伝道会」、「キリスト教伝道会」として発展し、やがて一八七八年、「キリスト教伝道会は救世軍である」という靈感をブースが受けたことをきっかけにして、「救世軍」(Salvation Army) が誕生してきました。そして、今や、百三十二の国と地域で活動するに至っています。創業期の救世軍を描いた『再生の人』(ハロルド・ベグビー著)には、ケート・リーという女性の救世軍士官により起こされた、人々の目覚ましい回心談が記されています。彼女は、ロンドンのはずれで、貧しい暗黒の世界に生きていた多くの人々のために祈り、支え、彼らを「再生の人」へと導いていったのです。リンダ・ボンド大將(第十九代救世軍大將)は、救世軍の使命について、こう言っています。

―― 神によつて建てられ、聖霊に満たされた、二十一世紀の救世軍。それは、傷を負い、痛み、破壊され、孤独な、失われたこの世に向かって、ひとつとなつて前進するように召されている軍隊。イエス・キリストによる変革のメッセージを携え、あらゆる方法をもつて、この世に出て行く軍隊である。

―― イエス・キリストは、その宣教の初めに、こう宣言されました。

「悔い改めよ。天の国は近づいた。」(マタイによる福音書4章17節)

神に立ち帰れ、天の国が到来したから、と説かれたのです。「立ち止まって考え、キリストを救い主と信じる者には天国がある。」ブースも、今を生きるあなたにそう呼びかけています。

(救世軍士官(伝道者))

1970年夏をめぐる不思議な出会い

牧師

原田 憲夫 さん

〈プロフィール〉 1950年、神奈川県大磯町生まれ。1978年神学校卒業後、町田市の教会での牧会を経て1983年4月から横浜市へ。2016年3月末まで横浜緑園キリスト教会主任牧師（現名誉牧師）。同年4月から同教会所属「巡回宣教師」。「パンの家」主宰。

<https://papaharada.jimdofree.com/>



一九七〇年夏、ひよんなことから私は奥多摩の古里で開かれたあるキャンプに参加した。当時の社会は、「安保条約」をめぐり激しく騒ぎ立っていた。

私はといえば、受験時は東大入試中止の煽り（はた）で大きな影響を受けたが、『霧の旗』『砂の器』の影響を受けたのか、「社会正義」に惹かれ、法律の道を志す大学に籍を置いていた。経済的な事情からもっぱらアルバイトを優先したが、当時、聞き慣れない「ロックアウト」という閉鎖状態で「日雇い」に明け暮れた。と同時に、過激な学生運動とは一線を画した「ベトナムに平和を！ 市民連合」（ベ平連）のデモ行進に参加していた。

「救世軍」——「K」との出会い

その年の五月、お茶の水駅頭で偶然手にしたチラシに「救世軍全国大会（神田共立講堂）」とあった。当時は「救世軍」が何なのか知らず、ただ「〇〇軍」という言葉にひっかかり、「戦争反対」といったある種の「一途さ」だけで覗いた。講演したウィックバーク大將という人の話は、私が予想した内容と違い、私には全くわからなかった。ただ、「新しいぶどう酒」へ新しい皮袋」という不思議な言葉だけが耳に残った。

講演会が終わりそのまま外に出ると、坊主頭のKという大学生が「今日の講演は？」と話しかけてきた。彼はクリスチャンだった。喫茶店「ジロー」で激論を交わし、気がつく私の大磯の家に帰る終電がなくなっていた。やむを得ず、足立にあった彼の家に泊めてもらうことになった。

布団を敷き、もう寝ようという時に、彼は私の枕元でカセットテープをかけた。眠りに落ちていく中で聞こえてきたのは「世の光……羽鳥明です」、そして「風が吹き飛ばすもみぐら」という言葉——算（み）を使って父の手伝いをした子ども時代を思い起こす言葉が、妙に耳に残った。あとで聖書の詩篇一篇にあることを知ったが、翌日、一宿一飯の仁義にと、彼が所属していた「望みの門」という名の教会の礼拝に付き合ったが、そこでの話は何も覚えていない。

「ビリー・グラハム師」との出会い

六月、「ジュラルミンの盾」に脅威を感じつつも、「安保反対」を叫びながら変革を求め、代々木公園までのデモ行進に参加した。六月は終わった。が、何も変わらなかった。ただ、道端に散乱したビニール袋のような「空虚さ」が心の底に沈んでいき、すべてが無意味に思えた。

そんな時（七月）、Kから日本武道館で開かれた「バプテスト世界大会」（私には意味不明だった）に誘われた。あまりに大勢の入場者に戸惑いながら、私たちは二

階の最後部に座った。そこでビリー・グラハム（高名人だと後で聞いた）というアメリカから来た伝道者の「説教」を聞いた。

ところが驚いたことに、彼はまるで「私」に向かってたまたまかけるように、激しく迫ってきたのだ。「世界を変えたいと思うなら、自分を変えよ」と。その帰り道、「聖書」を買った。そしてひたすら読んだ。

「羽鳥明師」との出会い

それから一週間後、あの時のB・グラハム師の通訳者が講師のキャンプだと言って、Kは奥多摩・古里にある「奥多摩福音の家」で開かれるキャンプに私を誘ってきた。「多摩川の上流か、キャンプファイアーか、懐かしいなあ」と気軽に参加した。行くと、主題は「力ある人生」（ネヘミヤ記8章10節）とあり、朝から晩まで聖書講演中心の、「世の光聴取者キャンプ」だった。そして講演者は、確かにあの時の通訳者、そして何とあのカセットテープの声の主、羽鳥明という伝道者だった。初めは場違いの所に来たかなと思ったが、すぐに自分が探していたものがこの中にあると気づいた。心には葛藤があったが……。

そこで羽鳥明師はこんな話をした。

「私たちの心の暗闇は、どんな高価なほうきで掃いても、どんな強力な掃除機で吸い込もうとしても、片づかない。どんなに蹴飛ばしてもたいたいても、決して消えない。ただ、『光』だけが暗闇を追いやることのできるのです。一瞬で消し去ることができるのです。そしてこの光こそ、『わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決して

やみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです』（ヨハネの福音書8章12節）

と語られるキリストなのです。このキリストは、私たちの心



羽鳥師の力強いメッセージ

の闇を生み出す人間の罪を全部引き受けて、十字架の上で自分のいのちと引き換えにすべての罪を取り除いてくださった。そして三日目によりがえり、信じる者に永遠のいのちをもたらしてくださったのです。あなたもこの世の光キリストを心に迎えませんか？」

“世の光キリスト”との出会い

初めて聞く話だったが、羽鳥明師の「説教」は私の空虚な心を激しく揺さぶり、渴いていた魂に染み込んできた。「社会正義」「平和」を叫びながら、心の内側は憎悪、偽善、汚れたもので埋まっている……そんな私の心の内側を全部見透かされていたのだ。

「自分の力で心の闇を一掃することはできない」と迫られた時、「ああ、これだ！」と「清水の舞台から飛び降りるような決心」をし、「キリストを信じます」と手を挙げた。涙と鼻水の中で、思い出されるままに罪・過ちを子どものように一つひとつ口で言い表した。その瞬間、心に温かい光が灯ったのを感じた。「いのちの光」が灯ったのだ。十九歳の夏だった。この日から、イエス・キリストは私の人生の「主」となった。

家路の間中ずっと、これまで感じたことがないほど世界がキラキラと美しく輝いて見えた。



「みちのく一人旅」、奥入瀬で



2021年夏、妻と共に

“友”——“自分”——“牧師”との出会い

キャンプから帰るとアルバイトで貯めたお金を手に聖書一冊をリュックに入れ、「みちのく一人旅」に出た。約十四日間、仙台から松島、中尊寺、小岩井農場、八幡平、十和田湖、奥入瀬、八甲田山、岩木山、弘前、恐山、大間崎まで、美しい景色の中をひたすら歩き、電車やバスに揺られながら聖書を読み、ユースホステル（今では多くが閉館）や駅構内待合室で夜を過ごしては、小さい頃からの歩みやこれからの人生を思い巡らした。

特に、高校時代の友との出会いに思いを巡らした。三年間合唱部に属していて、季節になると皆で「賛美歌」を歌ったが、その頃は「音」しか頭になかったことや、自分とはどこか違うなと思っていた純真な同級生Mがクリスマスチャンだったことに気がついた。『三四郎』『草の花』『星の王子さま』などについてよく語り合った。しかしなんと言っても、東大受験が叶わず京大に進んだものの、夢を捨てきれず翌年東大に入学し直した友人Wのことが思われた。火災瓶やロックアウトで学び舎とかけ離れた現実絶望し、彼は秋に自ら命を絶ったのだが、その葬儀で初めてクリスマスチャンだったと知った。「ひとり旅」を通して、これらみな私の内側の虚無感と繋がっていたことに気づかされた。

旅から戻ると大磯キリスト教会の丸井という牧師から手紙が二通届いていた。キャンプを主催した太平洋放送協会（PBA）に紹介されていた教会だった。その丁寧さに少し驚いた。あとでその牧師はアララギ歌人だと聞いた。以後、熊本天草出身の純朴な信仰の牧師と茨城訛りを通して伝わる夫人の誠実な人柄に触れ、毎週の伝道会、聖研祈禱会、礼拝に出席した。十二月二十日、私は冬の海で洗礼を受けた。立ち会う人々はたき火をして待っていたが、意外だが真冬の海は温かかった。不思議と、復活されたイエス・キリストがガリラヤ湖のほとりで弟子たちを待っておられたこと（ヨハネの福音書21章9節）が思い出された。

“様々な方々”との出会い

その後、不思議な転機を迎えた。一九七四年、交通事故に遭ったが、ベッドの上で「生きている」のではなく「生かされている」事実に驚き、泣いた。そして神がエリヤに語った「エリヤよ。ここで何をしているのか」（列王記I 19章13節）が、そのまま私の心に強く響き渡った。私の主キリストに呼び出された時だった。翌年、勤めていた役所を辞した。奇しくも「法律」から「律法」（神の教えと戒め）へと学びと訓練の場が移り、一九七八年春からキリストに良き知らせを伝える伝道者、牧師になった。

そして不思議だが今、私の入信の契機となったPBAが制作しているラジオ番組「世の光」のメッセンジャーとして今日まで約二十年間ご用をさせていただいている。またテレビ番組「ライフ・ライン」のメッセンジャーとして約十五年間お手伝いさせていただいている。二〇一六年春からは教会の主任牧師の責任から離れ、「巡回宣教師」として、呼ばれる所には聖書一冊を手にかけて行く。また、横浜の里山の住処で「パンの家」を主宰し、「いのちのパンであるイエス・キリスト―神様の愛」をお届けしたいと願いつつ、「神の旅人」として感謝し、歌いながら歩んでいる。

「一九七〇年夏をめぐる不思議な出会い」は、キリストとの出会いに繋がる出会いだった。もし「世の光キリスト」に出会わなければ、いまだに「闇」の中を空しく彷徨っていただろう。だが、今は「いのちの光」が私の内で輝いている。これからも私の「旅」の中で様々な方々と出会うだろう。今日この拙文を読んでくださったあなたもその一人である。結びにあたり、あなたにお尋ねし、お勧めしたい。

「あなたは今日、心の中に悲しみや心の闇、重荷をひとりで抱えていないだろうか？」
あなたも「世の光キリスト」を心に迎え、「いのちの光」を灯していただいてほしい！



世界をみつめて

〈ヨーロッパ〉

●ウクライナの危機に際しての支援活動 続報

ウクライナ情勢について日々報道がなされています。事態が長期化する中、ウクライナ国外に避難していた人々が



ウクライナ・ヴィーンヌイツャ



ハンガリー

帰国する動きもあるようですが、なお多くの人々が避難生活を余儀なくされています。ウクライナと周辺諸国、またヨーロッパ各地で、救世軍は英国の国際本部の緊急支援チームと連携を取りながら、食料品や物資支援とともに精神的、霊的なケアを続けています。

ウクライナ西部の町ヴィーンヌイツャの救世軍は、土曜日の「子どもクラブ」を再開しました。子どもたちが安心安全に遊ぶことができるよう、配慮しています。

スイスでは首都ベルンで、500人が滞在できる難民センターの運営をしています。ウクライナと国境を接するハンガリーでは、スイスからの多くの支援物資が難民の人々へ届けられています。ブダペストの救世軍は食事の提供や国境地点での支援を行っています。フランスの救世軍は他の団体と協働し、パリのポルト・ド・ヴェルサイユの

難民受け入れセンターで活動しています。ボランティアのメンバーは、温かい飲み物や軽食を配り、戦地を逃れてきた多くの女性や幼い子どもたちを迎えています。ここで、難民の人々は行政手続きをし、食事や休憩を取り、フランスでの長期的な滞在場所に向かうことができます。ノルウェーの救世軍は3月末から、最大規模の難民受け入れセンターの一つの運営を担っています。定住先が見つかるまでの数カ月を過ごす場所で、地元の自治体との協力のもと、食事の提供、医療サービス、子どものための活動などをおこなっています。どこの国でも、救世軍はニーズを抱えるすべての人に分け隔てない支援を提供し続けています。

（支援の最新情報、ご寄付については救世軍ホームページをご覧ください。）

救世軍とは？

What is The Salvation Army?

救世軍は、世界132の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会で、国際本部は英国ロンドンにあります。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本での働きは1895（明治28）年に始まり、小隊（教会にあたる）を拠点としての伝道と、^{はい}娼婦運動、失業者対策、病院や結核療養所の設立、児童や女性の保護、アルコール依存症者回復支援など、時代にさきがけて様々な働きを^{おこ}興してきました。現在は全国41の小隊、2つの病院、19の社会福祉施設を通して働きを進めています。

救世軍公報 ときのこえ

発行日 福音版 / 毎月1日、広報版 / 奇数月15日（除く7月）
定 価 福音版 / 1部40円、広報版 / 1部100円
（税込）クリスマス特集号（12月1日号） / 1部100円
振 替 00180 - 5 - 4400
発行兼 救 世 軍
印刷人 代表者 スティーブン・モーリス
編集人 山谷 真
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881（代表）
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 ピーアンドエス



社会福祉部長賞 飢える子の世にある限り社会鍋

栃木県 井上 弘子

社会鍋風強ければ声の張り

愛知県 水野 大雅

優秀賞 チョコレート買いひに出掛けて社会鍋

静岡県 遠山琴々乃

最優秀賞 ポーランド国境社会鍋並ぶ

神奈川県 田中 和美

今回は全国から三百五十六作品の応募をいただきました。心より感謝申し上げます。左記の作品が受賞されました。おめでとうございます。

第六回 救世軍社会鍋俳句コンテスト受賞作品発表

ほのぼの賞

革ジャンのポケット探る社会鍋

千葉県 梶 政幸

百年を超えて途切れぬ社会鍋

青森県 高橋 亨

無言でも心は温し社会鍋

岡山県 貞住 昌彦

佳作 野上卓、浅野まり、三宅加代子、菅貴久代、附田敦子

選者・唐澤南海子氏（現代俳句協会会員、「岳」無鑑査同人、第27回俳壇受賞、日本基督教団・信濃町教会員）

六月十二日（日）のオンライン創立記念コンサートで、各句の選評が紹介されました（救世軍公式YouTubeで視聴できます）。選評は『ときのこえ』（広報版初秋号／九月十五日発行）にも掲載いたします。

聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会 救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営（左記）、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。 ・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのこえ』の購読を申し込みます。 ・相談を希望します。